（第1回）

中

2026

国語

始める前に左の注意事項を読みなさい。

○始めの合図があるまで開いてはいけません。
○問題は全部で24ページあります。
○答えはすべて解答用紙に書きなさい。
○始まりの合図で、解答用紙に受験番号、氏名を書きなさい。
○質問のあるときは静かに手をあげ先生の指示を待ちなさい。
○終わりの合図があったら、ただちに筆記用具を置きなさい。

一　次の【A】・【B】は、砥上裕將『線は、僕を描く』の一節です。両親を事故で失い、心を閉ざしてしまった青山霜介は、アルバイト先の展覧会場で、水墨画の巨匠・篠田湖山と出会います。なぜか湖山に気に入られ、霜介はその場で弟子にされてしまいます。本文は、その後、霜介が湖山から、水墨画について学んでいる場面です。なお、水墨画とは、墨を水で溶き、和紙などに描いた作品のことです。それぞれの文章を読んで、後の問いに答えなさい。

【A】

僕はとにかく墨をすり、湖山先生を呼んだ。湖山先生は居眠りから目覚めて、描いて、僕はまた同じ言葉をもらい、また墨をすり……と、そんなことを何度か繰り返した。もういい加減疲れてきたので、いろいろ考えるのをやめて、ただなんとなく手を動かし、有り体に言えば適当に墨をすって湖山先生を呼んだ。すると湖山先生は最初のときとまったく同じく、特に不機嫌でもなく不愉快でもなさそうな顔で、筆をとると、

「(注1)筆洗の水を換えてきて」

と、言った。僕は言われたとおり廊下に出てすぐの場所にある流し場で、筆洗の水を新しいものに換えた。湖山先生の前に真新しい水を置いて席に着くと、湖山先生は待ち構えていたように筆を取って、墨を付けて筆洗に浸した。その瞬間、湖山先生は口を開いた。

「これでいい。描き始めよう」

僕は湖山先生が何を言っているのか、分からなかった。どうしてまじめにすった墨が悪くて、適当にすった墨がいいんだ？

僕はなんとも腑に落ちないという表情をしていたのだろう。湖山先生はにこやかに笑って答えた。

「粒子だよ。墨の粒子が違うんだ。君の心や気分が墨に反映しているんだ。見ていなさい」

湖山先生は、筆をもう一度取り上げて、いちばん最初に描いた風景とまったく同じものを描いた。木立が前面にあり、背後に湖面が広がり、さらにその背後に山が広がっているという絵で、レイアウトはまったく同じだ。

だが湖山先生が筆を置いた瞬間の墨の広がりや、きらめきが何もかも違った。

画素数の低い絵と高い絵の違いと言ったらいいのだろうか。実際に粒子が違うというのなら、そういうことなのだろう。小さなきらめきや広がりが積み重なり、一枚の風景が出来上がったとき、最初に見たときは漠然と美しいとしか感じられなかった絵が、二枚目になると懐かしさや静けさやその場所の温度や季節までも感じさせるような気がした。細かい粒子によって出来上がった湖面の反射は、夏の光を思わせた。薄墨で描かれた線のかすれが、ごく繊細な場所まで見て取れるので、眩しさや、色合いまでも思わせ、波打つ様子は静けさまでも感じさせた。その決定的な一線は、たった一筆によって引かれたものだった。同じ人物が同じ道具で、同じように絵を描いても、墨のすり方一つでこれほどまでに違うものなのかと、僕は（注2）愕然とした。とたんに僕は恥ずかしくなった。

①僕はとんでもない失敗をさっきまで繰り返していたのだ。湖山先生は相変わらず、にこやかに笑っている。

私が何も言わなかったのが悪いが、と前置きした後に湖山先生は言った。

「青山君、力を抜きなさい」

静かな口調だった。

「力を入れるのは誰にだってできる、それこそ初めて筆を持った初心者にだってできる。それはどういうことかというと、凄くまじめだということだ。本当は力を抜くことこそ技術なんだ」

力を抜くことが技術？　そんな言葉は聞いたことがなかった。僕は分からなくなって、

「まじめというのは、よくないことですか？」
と訊ねた。湖山先生はおもしろい冗談を聞いたときのように笑った。
「いや、まじめというのはね、悪くないけれど、少なくとも自然じゃない」
「自然じゃない」
「そう。自然じゃない。【中略】君はとてもまじめな青年なのだろう。君は気づいていないかもしれないが、真っすぐな人間でもある。困難なことに立ち向かい、それを解決しようと努力を重ねる人間だろう。その分、自分自身の過ちにもたくさん傷つくのだろう。私はそんな気がするよ。そしていつの間にか、②自分独りで何かを行おうとして心を深く閉ざしている。その強張りや硬さが、所作に現れている。そうなるとその真っすぐさは、君らしくなくなる。真っすぐさや強さが、それ以外を受け付けなくなってしまう。でもね、いいかい、青山君。水墨画は孤独な絵画ではない。水墨画は自然に心を重ねていく絵画だ」
僕は視線を上げた。
言葉の意味を理解するには、湖山先生の声があまりにも優しすぎて、何を言ったのか、うまく聞き取れなかった。不思議そうな顔で、僕は湖山先生を見ていたのだろう。湖山先生は言葉を繰り返した。
「いいかい。水墨を描くということは、独りであるということとは無縁の場所にいるということなんだ。水墨を描くということは、自然との繋がりを見つめ、学び、その中に分かちがたく結びついている自分を感じていくことだ。その繋がりが与えてくれるものを感じることだ。その繋がりといっしょになって絵を描くことだ」
「繋がりといっしょに描く」
僕は言葉を繰り返した。③僕にはその繋がりを隔てているガラスの部屋の壁が見えていた。その壁の向こう側の景色を、僕は眺めようとしていた。

その向こう側にいま、湖山先生が立っていた。
「そのためには、まず、心を自然にしないと」
そう言って、また湖山先生は微笑んだ。湖山先生が優しく筆を置く音が、耳に残った。その日の講義は、ただそれだけで終わった。
何か、とても重要なことを惜しみなく与えられているようで、そのすぐ前を簡単に通り過ぎてしまいそうになっている自分を感じていた。
小さな部屋に満たされた墨の香りと、湖山先生の穏やかな印象が、④カチコチに固まっていた水墨画のイメージをボロボロと打ち壊していくのが分かった。

【B】

「さて、じゃあ、今日も見せてもらおうかな」
と、湖山先生はにこやかに話しかけた。僕は一礼してから絵を描き始めた。僕が描ける絵は一つしかないので、それを描くだけだ。
筆に濃墨を含ませて、根元を逆筆で作り、韮の葉っぱのような鋭い線を葉先に向かって作っていく。
真っ白な紙に墨のアーチができる。
真っ白な空間に、ポツンと一枚の葉が浮いている。その鋭く長い一枚に寄り添うように二筆目。
さっきの葉っぱの方向とはまるで反対のほうへ線を引いていく。二つのアーチはそれぞれの方向へ向かって伸びて、アーチとアーチが重なる根元には切り込みを入れたような小さな隙間ができている。その場所を切り裂くように三筆目を引く。そこからは夢中だった。とにかく形になっていくように願いながら、葉を画面のなかで構

成していった。そして、この前、湖山先生がやっていたのを真似て薄墨で花を描き、最後に点を花の周りに足して一枚を終えたけれど、出来上がったものは、かろうじて花と葉っぱが付いて何とか植物に見える程度の〔注3〕拙（つたな）い絵だった。

とにかく一枚を描き終えて、恐る恐る湖山先生の前に差し出すと、湖山先生は、

「よくがんばったね」

と言った。何をがんばったのか自分でもよく分からない。ただただ夢中で手を動かしていただけだ。湖山先生は筆を取って、もう一度技術を見せてくれた。湖山先生はいつもの電光石火のような素早い筆ではなく、

［　A　］話すような速度で絵を描いた。

僕はその解答編のような技術を、目を皿のようにして記憶にとどめていた。

なぜ、同じようにならないのだろう？

何が違って、こんなにもうまくいかないのだろう？

という想いが、先生の手順のすべてを見逃すまいという気持ちに変わった。一方で湖山先生の解答が、手によって示されることが楽しみでもあった。湖山先生は、僕の表情を見て何だか嬉しそうに笑っていた。

「そんなに心配しなくてもいいよ。君はよくやってる。ちゃんと練習してきていたね」

「は、はい。とにかく描き続けました」

「それでいいんだよ。最初はセンスとか才能とかそんなのは何も関係ない」

「センスとか才能とかってあまり関係ないのですか？」

「少なくとも最初は、あまり関係がない。できるかどうかは分からない。でもとにかくやってみる。それだけだよ」

「とにかくやってみる……ですか」

どこかで聞いたような言葉だ。

「才能やセンスなんて、絵を楽しんでいるかどうかに比べればどうということもない」

「絵を楽しんでいるかどうか……」

「水墨画ではそれを気韻というんだよ。気韻生動を尊ぶといってね、気韻というのは、そうだね……（注4）筆致の雰囲気や絵の性質のことも言うが、もっと端的に言えば楽しんでいるかどうか、だよ」

「芸術性ということですか？」

「いや。それとも少し違うかもしれない。もっと純粋にその人の心がどれくらい清らかで伸びやかで生き生きと描かれているかどうか、ということが水墨画の最大の評価になってくるんだ。見どころと言ってもいいかもしれない。形や技術なんてそれに比べれば枝葉にすぎない。絵にとっていちばんたいせつなのは生き生きと描くことだよ。そのとき、その瞬間をありのままに受け入れて楽しむこと。水墨画では少なくともそうだ。筆っていう心を掬いとる不思議な道具で描くからね」

話しながらも手は［　B　］進んでいく。

葉を描く技法の速度やタイミングを僕は目に焼き付けていた。筆が腕の動きを伝って、ゆるやかに弧を描いていく動きは、見ているだけで目が惹きつけられる。ただ単に腕を振り抜く、ということではなく、手と筆がそもそも一つであったかのような収まりの良さのうえに、力が抜けている。とても集中しているのに、何処までも力が抜けている、という奇妙な感覚が、筆を握った手と腕の動きだけでこちらの内側まで伝わってくる。『筆という心を掬いとる不思議な道具』で、こんな感覚をみせられるということは、湖山先生の心の在り方がこんなふうに心地よくできているということなのだろうか。それはどんなに幸せな心持ちなのだろう。

技術を ⓐ凝視している つもりだったのに、湖山先生が描いている空気感そのものに僕は吸い込まれていく。ずっ

と見ていたい。ずっとこの瞬間の中に浸っていたい。そんな思いが湖山先生のゆったりとした筆致から伝わってきた。

何なのだろう、これは……。そう考えている間にも、筆は進み、湖山先生は話を続ける。

「難しい話をしても仕方ない。ともかく最初は描くこと。成功を目指しながら、数々の失敗を大胆に繰り返すこと。そして学ぶこと。学ぶことを楽しむこと。失敗からしか学べないことは多いからね」

湖山先生は、薄墨と濃墨を絶妙なバランスで含ませた筆で、［　C　］花を描いた。周りの葉と比べれば色の薄い小さな花だが湖山先生がそこに筆を置くと、周囲の余白までも柔らかく感じられた。花は三つ描かれ、それぞれの花の周囲に点が打たれると湖山先生は筆を置いた。

「この点は、心字点といって、心という字を書くくらい大事に打ちなさいよ、というような独特の点描だ。ただの点だからっておろそかにしてはいけない。この点を何処にどんなふうに打てばいいのか分かれば、君も一人前だね」

そう言って、湖山先生は筆を置いた。

僕の思考は、描かれた手の動きと、言葉を同時に追いかけられず、湖山先生の話している内容の理解までついていかない。僕は一礼しながら黙り込んでしまった。頭が映像を追いかけていて、言葉を発しようとしても何処かで(b)せき止められてしまっていた。こんな感覚になったのも初めてだった。湖山先生はそれでもにこやかに話を続けた。

「細かい技術は、千瑛に習いなさい。千瑛は斉藤君譲りの(注5)巧みな技を持っているから。技にもとても詳しい。斉藤君自身に技法を訊ねるのもいいだろう。彼以上に地道な訓練をした絵師はそういないからね。だが迷うこともあるだろう。その時には、私か西濱君に相談しなさい」

僕は頷(うなず)いた。湖山先生から筆を受け取ると、新しい紙を出してまた描き始めた。

湖山先生は席に戻ると、ぼんやりとお茶を啜(すす)っている。しばらくして、僕は湖山先生との沈黙の時間を埋(う)めるように、素朴(そぼく)な疑問をぶつけてみた。

「斉藤さんと西濱さんは、どちらが凄い技術を持っているのですか？」

そう声を掛けると湖山先生は、斉藤君と西濱君かあ、と、どうでも良さそうにぼんやりと呟(つぶや)いた後、何度か瞬(まばた)きをして、一人で納得したように話を始めた。

「技術の話で言えば、西濱君は斉藤君には及ばないね。西濱君はそういう点ではてんでだめだね。彼は細かい男ではないから。本人もそれは分かっていると思うけれど」

僕はびっくりして質問を続けた。

「で、では、斉藤さんは西濱さんよりも上手い絵師さんなのですか？」

湖山先生は、今度はびっくりしたような顔をして、それから愉快そうに笑った。

「いいや、いいや。斉藤君と西濱君じゃあ勝負にならないね」

「で、では、斉藤さんが上だと？」

湖山先生は面白そうに［　D　］。

「いや、西濱君が遥かに上を行っているよ。水墨では斉藤君は西濱君を仰ぎ見るしかないだろうね。それも斉藤君本人が一番分かっているからね」

「そ、そうですか……」

技術は明らかに斉藤さんが上で、それなのに画家としては明らかに西濱さんが上、というのは奇妙な発言だが、師匠である湖山先生本人がそう言うので疑いの余地はなかった。それも結局、技術以上の何かがたいせつだとい

う話になるのだろうか。

「必ずしも……」

湖山先生はまたそこでお茶を飲んだ。僕は言葉を待った。

「⑤拙さが巧みさに劣るわけではないんだよ」

僕はたぶんまったく分からない、という顔をしていたのだろう。湖山先生は皺皺（しわしわ）の顔をさらに皺皺にして、

「君にも必ず分かるときが来るよ」

とおかしそうに言った。その後、何度か細かい点の手ほどきを受けてその日は終わった。

【語注】

1　筆洗　……　筆の穂先を洗うために水を入れる器。

2　愕然　……　意外なことにひどく驚く様子。

3　拙い　……　技術や能力が未熟で、上手ではないこと。

4　筆致　……　筆の運び方や描写のスタイルのこと。

5　巧みな　……　物事を手際よく、うまく成し遂げるさま。

問一　――部①「僕はとんでもない失敗をさっきまで繰り返していたのだ」とありますが、ここに至るまでの「僕」の心の動きについて説明したものとしてもっともふさわしいものを、次から選び、記号で答えなさい。

ア　水墨画に適した墨をするためには、平常心を保ちながら、無心の状態でいることが大切だとわかり、これまでの自分の考えが勝手な思い込みであったことを理解し、恥ずかしく思っている。

イ　水墨画にきらめきを与えるためには、描こうとするものによって墨のすり方を変える必要があることを知り、常に力を込めて行っていた自分の間違いに気づき、恥ずかしさを感じている。

ウ　水墨画を描くために力を入れてまじめに墨をすっても、最適な粒子の墨をすることはできないことがわかり、自分のやり方が間違っていたことを思い知らされて、恥ずかしく思っている。

エ　水墨画を描く時は、細かい粒子の墨をすって使うことが最も重要であるとやっと理解し、その場の感情で湖山先生に反論してしまった自分自身の姿を思い返して、恥ずかしさを感じている。

問二　――部②「自分独りで何かを行おうとして心を深く閉ざしている」とありますが、これとは反対の状態が説明されている四十字の表現を、**――部②より後の【A】の本文中から探し、**はじめの五字をぬき出して答えなさい。

問三　――部③「僕にはその繋がりを隔てているガラスの部屋の壁が見えていた。その壁の向こう側の景色を、僕は眺めようとしていた」とありますが、この表現について説明した次の［　X　］に入るもっともふさわしい表現を後から選び、記号で答えなさい。

「ガラスの部屋の壁」の「ガラス」は透明であるため、外を見ることはできるが、「壁」があるため、「壁」の外にあるものに触れられない状態を表しており、これらを合わせて考えると、傍線部の表現は「僕」が［　X　］様子を表している。

ア　外の世界との繋がりをあきらめてしまい、完全に心を閉ざしている
イ　自然や人と繋がりを求めながらも、それに到達することができない
ウ　まじめであるために心が硬直し、人との繋がりに目が向けられない
エ　自然や人との繋がりを実感できたが、それと離れたいと思っている

問四　――部④「カチコチに固まっていた水墨画のイメージをボロボロと打ち壊していくのが分かった」とありますが、こうした「僕」の状態を、ことわざで表現したものとしてもっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　瓢箪（ひょうたん）から駒　　イ　石橋を叩いて渡る　　ウ　急がば回れ　　エ　目から鱗（うろこ）が落ちる

問五　［　A　］～［　C　］に入るもっともふさわしい語を次から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号は一度しか使えません。

ア　ふわっと　　イ　ハキハキと　　ウ　ゆったりと　　エ　スラスラと　　オ　はっきりと

問六　═══部ⓐ「凝視している」・ⓑ「せき止められて」の本文中における意味としてもっともふさわしいものを、次の各群の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ⓐ凝視している

ア　相手の立場から見直している　　イ　視線を集中させて見ている

ウ　いろんな視点から考えている　　エ　遠くの一点を見つめている

ⓑせき止められて

ア　どっとあふれでて　　イ　だんだんととまって

ウ　さえぎりおさえて　　エ　さからってすすんで

問七　［　D　］に入るもっともふさわしい表現を次から選び、記号で答えなさい。

ア　頭をひねった　　イ　手のひらを返した　　ウ　目をそらした　　エ　首を振った

問八　【B】の本文全体をふまえると、――部⑤「拙さが巧みさに劣るわけではないんだよ」という言葉で、「湖山先生」はどのようなことを伝えていますか。その説明としてもっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　細かい描写が積み重ねられ、繊細で落ち着いた心によって描かれた作品こそが、水墨画の世界では高い評価を得られるということ。

イ　水墨画で芸術性を表現するためには、形や技術を気にすることより、ありのままに受け入れて楽しむことが大切であるということ。

ウ　技術が優れていることよりも、絵の中に心が生き生きと表現されていることの方が、水墨画を描くうえでは大切であるということ。

エ　水墨画の評価においては、楽しんで描いているかどうかが最も大切な観点であり、才能やセンスはまったく関係がないということ。

問九　授業で【A】と【B】の本文を読んだ四人の生徒が、それぞれの特徴や表現について、感想を述べ合っています。これについて、問いに答えなさい。

はるか　【A】も【B】も、「僕」に対する「湖山先生」の言動を受けて、物語が展開しているね。穏やかに描写される「湖山先生」の言動から、その人柄がよく伝わってくるなあ。【A】では、「僕」がすった墨を「湖山先生」が見て、「これでいい。描き始めよう」と言ったことに対して、「僕はなんとも腑に落ちないという表情をしていたのだろう」と述べているね。

なつき　そうだね。実は、【A】の「僕はなんとも腑に落ちないという表情をしていたのだろう」とほぼ同じ内容を表現した一文が、【B】にもあるよね。気づいてた？

あきお　ああ、【B】の後半にある「［　ⓐ　］」の一文のことだよね。どちらの一文も、「湖山先生」の言葉を受けて、「僕」が［　ⓑ　］様子が表現されているよ。【A】も【B】も、全体的に落ち着いた雰囲気の文章の中で、「湖山先生」の言動が、「僕」の心に動きを与えているね。

ふゆた　ほんとうにそうだね。この作品は【A】も【B】も、［　ⓒ　］と思うなあ。

〈Ⅰ〉 ［　ⓐ　］に入るもっともふさわしい一文を、【B】の本文中から三十字以内で探し、はじめの五字をぬき出して答えなさい。

〈Ⅱ〉 ［　ⓑ　］に入るもっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　親近感を抱いた　　イ　納得できない　　ウ　対抗心を持った　　エ　安心できない

〈Ⅲ〉 ［　ⓒ　］に入るもっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　大きく揺れ動く「湖山先生」の心情や水墨画への考え方を、具体的な出来事を描写することで、読み手に分かりやすく示している

イ　場面が切り替わっていくスピード感のある展開であり、「僕」と「湖山先生」の感情の変化やその交流が、捉えやすい構成になっている

ウ　日常会話を中心に物語が展開され、「僕」が「湖山先生」の言葉の意味を理解するまでの過程を、順を追って段階ごとに示している

エ　「僕」の視点で物語が説明され、水墨画について「僕」が大切なことに気づいていく様子が、丁寧な描写によって表現されている

二 次の詩を読んで、後の問いに答えなさい。

手　　石垣　りん

私のひろげた手
私の眼(め)の前に並んだ手
これは生きている
生きてうごいている

この手がいつか老いてゆく
この手がいつかうごかなくなる

①私を弔(とむら)う他人の手によつて組み合わされ
私の冷たくなつた胸の上で
私の魂(たましい)の、もうどこにもいなくなつた世界に向つて
いつとき存在するだろう

ああその外部の
今日の如(ごと)く光あふれそよぐとき

とざされた私の瞳にかわつて
すでにかわいたこの手の皮膚は何を見
何を感じることだろう

手よ
お前が握つたたくさんなもの
その記憶をどこへ捨ててゆくのか
語れ
（ふと眼を移せば
花びらのように②ひらひらと手を振つて
次々に遠ざかる
おびただしい生きものの行列がある

どこへゆくのか？）

間違いもなく　この手
死を約束した私の生の
ありありと③かなしい手の表情である

両手を合わせれば不思議にあたたかく
これは私のものだ、という
が、やがては失われる
たしかな
しかしあるかない
これこそただひとつの手応(ごた)えである。

問一　この詩の形式を次から選び、記号で答えなさい。

ア　文語定型詩
イ　文語自由詩
ウ　口語定型詩
エ　口語自由詩

問二　「手」を用いた慣(かん)用句として正しいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　手から火が出る　　イ　手を打つ　　ウ　手がかたい　　エ　手がさわぐ

問三　――部①「私を弔う他人の手によつて組み合わされ／私の冷たくなつた胸の上で」とあるが、この部分とは対照的な表現となっている部分を本文から二十字以内でぬき出しなさい。

問四　――部②「ひらひらと」の表現上の特徴は何か。もっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　対句　　イ　擬態語　　ウ　倒置法　　エ　体言止め

問五　――部③「かなしい手の表情である」とあるが、なぜ「かなしい」のか。その説明として**間違っているもの**を次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　年を重ねるにつれ老いていくものであるから

イ　自分のものという実感がやがて失われてしまうから

ウ　いつの日かまったく動かなくなってしまうものであるから

エ　これまで握ってきたものをどこで捨てるべきかわからないから

問六　この詩を授業で読んで、Hさんがノートに感想をまとめました。次の空らんにふさわしい語句を、【A】は後の語群から選び、記号で答え、【B】は詩の本文から一字でぬき出しなさい。

この詩を読んで、「手」は直接【A】ものであり、耳や鼻、口といった普段の生活の中で使っている他の器官とは違うことに気が付きました。だから、「手」は様々なことを教えてくれる特別なものであると思いました。

また、私は最後の部分の「しかしあるかない／これこそただひとつの手応えである」が印象に残りました。作者は老いていく自身の手を見つめ、「死」というものを意識する一方で、目の前で動いている手に【B】そのものを感じていたのだと思います。動く「手」はまさに私の【B】の証であり、それを「ひとつの手応え」と作者はとらえたのではないでしょうか。この詩を読んで、私自身もひとつの手応えを感じることができたような気がします。

【A】　ア　感じられる　　イ　聞こえる　　ウ　見える　　エ　支える

三　次の和歌について答えなさい。

A　めぐりあひて　見しやそれとも　わかぬ間に　雲隠(がく)れにし　夜半の月かな

B　吹くからに　秋の草木の　しをるれば　むべ山風を　○○○といふらむ　文屋康秀

C　嘆(なげ)きつつ　ひとり寝る夜の　明くる間は　いかに久しき　ものとかは知る　右大将道綱母

問一　Aの和歌をよんだのは、『源氏物語』を書いたとされる人物である。その人物を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　兼好法師　　**イ**　松尾芭蕉　　**ウ**　紫式部　　**エ**　清少納言

問二　Bの和歌について、次の先生と生徒のやりとりを読み、和歌Bの空らんに入る言葉をひらがな三字で答えなさい。

先生　Bは面白い和歌です。作者は山にビューッと吹くとても強い風を受けてしおれてしまった草木を見て、ある漢字が思い浮かんで作った歌だと考えられます。

生徒　その光景を見て、ある漢字をイメージしたということですか。

先生　そうです。空らんに入る言葉は漢字一文字でも表すことができます。

問三　Cの和歌の気持ちを表したものとしてもっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　たった一人で寝ることができずに泣きわめいているわが子を見ていると、夜が明けるまでの時間がとても長く感じてしまうものなのですね。

イ　たった一人で寝る夜が久しぶりであるなと思っているうちに、気が付けば夜が明けてしまい、せっかくの時間を無だなものにしてしまいましたよ。

ウ　嘆きながらあなたが来るのを一人で待っています。そのような夜が明けるまではとても長く、どれだけつらいか、あなたにはわからないでしょうね。

エ　嘆きながらあなたが帰るのを待っています。一人で寝る夜をしばらく過ごしていないので、たまには一人で夜明けを迎えたいものです。

問四　短歌の数え方としてふさわしい言葉を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　字　**イ**　首　**ウ**　作　**エ**　音

四　次の問いにそれぞれ答えなさい。

問一　次の語句は、敬語のある決まりで分けられている。それぞれのグループの中で一つだけ、その決まりに当てはまらない語句がある。それぞれ記号で答えなさい。

A　**ア**　名前　**イ**　住所　**ウ**　職業　**エ**　利用　**オ**　意見　**カ**　苦労

B　**ア**　お読みになる　**イ**　いらっしゃる　**ウ**　召し上がる　**エ**　ご覧になる　**オ**　申し上げる

問二　クラスで生徒たちがそれぞれ「ことわざ」を調べ、その例文も考えてきました。それぞれの「ことわざ」にふさわしくない例文を挙げている生徒を一人選び、記号で答えなさい。

生徒A　**「雨降って地固まる」**

体育祭の種目決めがなかなか決まらなくて、クラスは大さわぎであったけれど、雨降って地固まるだね。今じゃ、クラスの結束が強くなったよね。

生徒B　**「絵に描いた餅」**

文化祭のクラス企画のプランには現実性がないよね。これだと絵に描いた餅だよ。このままだと心配だな。

生徒C　**「枕を高くして寝る」**

ずっと準備をしてきた百人一首カルタ大会がいよいよ明日で、緊張して眠れなさそうだ。だから今夜は枕を高くして寝ることができるよ。

生徒D　**「のれんに腕押し」**

来年度の生徒会予算について何度も何度も話し合ったけれども、残念ながら思い通りにいかなかった。のれんに腕押しで終わってしまったよ。

問三　次の文は四字熟語の説明である。その説明としてもっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

「都会を離れて、心穏やかに生活すること」

ア　日進月歩　　イ　以心伝心　　ウ　朝三暮四　　エ　晴耕雨読

五　次の――部のカタカナを漢字に直しなさい。

①授業でヤセイ動物について調べた。

②今日はコウラク日和だ。

③遠足が雨でジュンエンとなってしまった。

④出かける前にメンミツな計画を立てた。

⑤動物園に着くまでの時間をハカる。

六　次の――部の漢字の読みをすべてひらがなで答えなさい。

①朝日に照らされ朝顔が映える。

②祖母からもらった辞書を重宝している。

③選手の直筆サインをもらった。

④最寄り駅までの行き方を確認した。

⑤先日、祖母と観た映画は圧巻だった。